



No27 すべての子どもの学びと育ちを保障する特別支援教育

第2回 教育講演会の講話より (2)



No26に続き、岡山大学の佐藤暁先生と共に行った「すべての子どもの学びを保障する」ための勉強会の内容をご紹介します。

前は、幼児や小学校低学年の「待つこと」の事例でしたが、今回は、高学年や中学生の事例で、かなり自己肯定感をなくしてネガティブになっている生徒をどう理解していくか、「書き出し」という手法を活用し、しっかりとその子の進むべき方向を見出させていく事例をお伝えしていきたいと思ひます。

「大切な話なので、紙に書きますね！」

・・・“書き出し”をすることによって、気持ちの確認ができます・・・

<事例> 知的な遅れはないものの、言語性が弱く発達がいのある中学1年の男子

- ・ 生徒の様子...「おれはどうせダメだ！」なんでここ(サマーキャンプ)に来なくてはならないんだ！」と反抗的で悲観的な態度。
- 「来たくなかった」「とにかく帰る」と何もしないで帰ろうとする状況に対し、「帰る前に総監督(佐藤先生)から5分だけ話があります。」と伝えた。.....(言い切ることが大切です)
- ・ 総監督:「どうしてこのキャンプはあるのだと思ひますか？」
- 「大切なことだから紙に書きますね。」 「今回は、君がよりよく生きる手助けをするために企画しました。」.....(本人の前で書き出します)
- ・ 君:「お母さんはコミュニケーションが苦手だからここに来たと言っていた。」
- ・ 総監督:「なるほど、とても大切なことなので書いておきます。」
- ・ 君:「どうせ僕はだめなんだ。」「周りの人は僕をばかにするんだ。」
- ・ 総監督:「そうなんだね。わかったよ。」 略
-(書くことによって気持ちの確認が出来ます。分かったことが分かります。この生徒はこの後、落ち着いて自分の心を整理し、キャンプに参加することができたそうです。)

発達障がいのある子にとって、総監督(佐藤先生)のようなカリスマ的先生が、該当児の進むべき方向をしっかりと助言できることが必要です。カリスマとは、絶対的な正しい判断の基準を示す人であり、この人がこうだと言ったらこうなのだ、という人です。(発達障がいがあるからといって、なんでも許すとか自由にすることとは誤った考え方です。しっかりと社会的ルールを教えていくことがかかって必要な子たちなのです。)そのかわり、カリスマは、どんな時にも、その子の味方であってくれる人です。

その人は担任でなくてもいいのですが、学校の中にそんな人がいたらその子は幸せですね。

お話の中で、特に印象に残った言葉がありました。

「発達障がいのある子は、
学校に配慮してもらうために来ているのではない。
学校には、学ぶために来ている。」
学ぶことが、どのように学んでいたかをもう一度見直したいですね。



<受講者の感想>

- ・ (前略)「書き出し」の件は、授業の展開、その子の考え方、寄り添い方等、自分自身の考え方・視野が広がっていきました。教員2年目ですが参考になりました。(中学校教諭)
- ・ いかに人間関係の中での教育が大切かを感じ反省しきりです。教育に携わる者として、原点に思われしました。心に訴える内容で来てよかったです。(小学校教諭)

